



仕事という名の愛に感謝

【大阪府】西田 恵子 51歳

無菌室の清浄度(クラス)が下がった日の午後。足浴と清拭セットをのせたワゴンを押して看護師のKさんが入ってきた。予定にははず……と戸惑う私をよそに、「いいのいいの。今日私がしたいと思っていたことだから」と用意を始めた。

「はい、足入れて」お湯でふやけた垢まみれの指一本一本まできれいにし、「気持ちいいでしょ! 次は体ね」と熱めのタオルで丁寧に何度も拭いてくれた。

「無菌室を出られる日も近いよ。いつも明るく前向きな西田さんがいないと寂しいって病棟のみんなが言ってるよ。長い間本当によく頑張ってきたね。ホント、よく頑張ったよ!」

少し間があき、背中を撫でながら耳元で、

「泣いていいよ!」

と言った。そのとたん、涙があふれて止まらなかった。私は声をあげて泣いた。

無菌室ではいつもの「キャラ」もどこへやら。想像以上の過酷さにこれは治療なのかと思うこともたびたびあった。ベッドに沈み天井を見つめ、ただ時間がすぎるのを待つ夜中、そっと手を握ってくれたのは彼女たち看護師だった。やっとなんだ薬を嘔吐した時、一緒に吐しゃ物を見て薬を見つけてくることまでしてくれた。「ごめんね」と謝る私にそういう時は必ず「仕事だからいいのよ」と答えた。ビニールカーテン越しに彼女た

ちの気配を感じるだけでホッとすることができた。

私頑張ったんだ。共に闘ってくれた看護師さんの言葉に胸が熱くなった。妊娠半年でがん告知を受けてから、ただ前を見て走り続けてきたこの8カ月。これからの生活を思い今泣かせてくれたんだと思った。退院の日、「またあなたに会いたいと思うけれど、それはここへ戻ってくるってことだから、会わないことを心から願っている。大丈夫。焦らずに頑張って」。そう言っただけで送られてきた。

あれから25年。
「会いたいなあ!」